
孤独な男の幻想入り

牙練

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独な男の幻想入り

【Nコード】

N8248Y

【作者名】

牙練

【あらすじ】

家族を失い、幻想郷と言う架空の世界に縋りつく青年。彼はあらゆる物・事を増減する程度の能力を使い幻想入りした。彼は優しい。しかし、彼は現実とも折り合いを付けながら幻想郷を生きていく

よく解る解説・主人公編（前書き）

今のうちに書いておかないと後々面倒なんで。

よく解る解説：主人公編

直人

年 20

身長 男子高校生並み

血液型 O型

容姿 普通・黒髪・黒い瞳

性格 お人よし・優しい・意外に熱い・面倒くさがり

能力 あらゆる物・事を増減する程度の能力

詳細：能力を使い脅迫染みた行動をしようとした時、スキマに落ちた。

紫と初対面時に患者と呼ばれる。

その後和解。

普段は無表情な顔をしている。

クールかと言うとただ単に不器用なだけである。

ここぞと言う時、感情が溢れ出す。

様は感情的。

一夫多妻を願望にしているが、叶わない夢と諦めている。

尚、鈍感では無いが自分に向けられている好意は自分に向けられている物では無い・一時の気の迷いと決め付ける。

年上には敬語を使うが、砕けた相手に使う気は無い。

無神経に人の気に障る事を聞いてしまう。

家事は基本的に出来るが、料理・洗濯はまだまだ。

現在の姓は博麗を名乗っている。(と言うより、名乗らされた。)

能力説明：あらゆる物と事象を増減する。

物は増やしたり減らしたり出来る。

人物を増やす・減らす事は出来なくも無いが、寿命を使うので多用

(と言うか使わない)しない。

持病・感情・寿命・能力・身体能力・免疫などを増やしたり減らしたり出来る。

正し、減らす場合は必ず“1”残る。

増やす場合上限が無ければ何処までも増やせる。

……特殊な行動をした際は問答無用で全能力が増える。

彼はまだ純情です。

弾幕：基本的には丸いが、集中すればどんな形の弾幕になる。

威力を増やしたり減らしたり出来る。

場合により一瞬で消滅してしまう程の弾幕も撃てる。

様はスペルカードルールを無視した威力とも言う事。

The Grimoire of Marisa

ドレーピングタイプ

自らの身体能力を飛躍的に上げて攻撃を仕掛けるタイプのスペルカ

ード・弾幕。

妖怪の賢者の論：彼は不安定な精神をしている。あの吸血鬼の妹よ
りかは強いけど、我を忘れてしまったら非常に不味い存在になるわ
ね……。

幻想入りする際も、脅迫染みた行動を取ったし。

余程追い込まれる事さえ起きなければ良いけど……。

よく解る解説・主人公編（後書き）

と言う設定です。

専門的知識（前書き）

東方Projectを知らない人が読んだ場合を想定して作ってみた。

専門的知識

スペルカードルールとは、幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段とされており、人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールである。「命名決闘法」という呼び方もあり、技のほうを「カードアタック」と呼ぶこともある。

弾幕やスペルカードは「本当に花火と同じ」であり、名前を付けないと作品になりえない。

この作品では、弾幕を撃てない人間が多く 主に人里の住民

対等と言えるのかと聞かれたならば違つとしか言えない。

尚、特定の妖怪達は人間を殺さない契約を交わしている。

その代わり、八雲紫が“外の世界”から自殺希望者・自殺した遺体・死刑囚などを攫い、契約を交わしている妖怪に提供している。

もっとも、人間を嬉々として殺すと言う訳では無く、その命を糧にさせて貰つと言う感情で殺している妖怪が多い。

人間風に言つならば、人間が取っている“食事”に該当する。

関係無いが、“いただきます”は命を食べると言う意味である。

一部は人間を玩具にしたり飾りにしたりしていたが、現在はそんな事はしていない。(この小説及びそれ以外の小説の大多数。)

The Grimoire of Marisa

霧雨魔理沙がスペルカードについてメモをしたノートより抜粋

一部スペルカードの種類について書かれている。

魔理沙はノートの中で「ルールの無い世界では弾幕はナンセンスである」と語り、八雲紫の『弾幕結界』や藤原妹紅の『インペリシャ

ブルシューティング』のような「攻撃するよりも人に見せる事」に重きを置いた『演劇タイプ』のようなタイプのスペルカードは純粋な殺し合いをする場合ではナンセンスであると語っており、改めてスペルカードが『殺し合い』を『遊び』に変えるルールであるという事実を強調している。また魔理沙は綿月依姫に対してスペルカードの説明をする場合、「この世でもっとも無駄なゲーム」であると教えている。

種類

演劇タイプ

人に見せる事を重視したタイプのスペルカード。魔理沙はこういったタイプの弾幕が生まれる理由をスペルカードが「遊び」だからであり、殺し合いの為に使うのはナンセンスなタイプのスペルカードであると語っている。

奴隷タイプ

幽霊や人形、使い魔などを使役して攻撃させるタイプのスペルカード。使用者のスキルが高くなければ使えないがコストパフォーマンスが良い攻撃が多い。類型に「インビジブル奴隷タイプ」「自爆型奴隷タイプ」「演劇奴隷タイプ」「純粹奴隷タイプ」なども存在する。

バグタイプ

適当に弾をバラ撒くタイプのスペルカード。力の弱い妖怪が使う事が多いらしい。

ストレスタイプ

避ける側の動きなどを制限するタイプのスペルカード。移動型と視覚型、神経毒型や複合型など種類が多い。

ドーピングタイプ

自らの身体能力を飛躍的に上げて攻撃を仕掛けるタイプのスペルカード。

因みにこの小説の主人公は、弾幕と身体能力を増減できる“特化型”である。

フラクタルタイプ

一定の形をして次から次へと模様が生まれるタイプのスペルカード。

スペルカードについて

スペルカードというのは自分の攻撃に名前をつけたものという設定であり、各スペルカードには、攻撃からイメージできる名前がつけられている。

基本的には・符名「カード名」という形式で名前が付いている。

・符名

符名の部分には、カード名などをイメージした単語が入る。大抵「*符」（氷符、月符 e t c）の形の漢字二文字が入る場合が多いが、それ以外の2文字（神罰、想起 e t c）や3文字以上（正体不明 e t c）の単語が入っているものや、アルファベット（Q E D）が入っているものも存在する。また、一部の難易度の高いスペルカードには符名が付いていない場合もある。

・カード名

カード名は、文字通り「カードの名前」を表す。カード名は「（ ）鉤括弧」で括って表記される。カード名は、そのスペルカードの攻撃をイメージした様々な名称が付けられている。

・ラストスペルについて

名前の通り、“最後の”もしくは“切り札”と言つ意味。

大体は本気を出す時、切羽詰った時、危機的状況化を覆す時に使用される。

通常のスペルカードと比較するとやや難度が高く、威力と弾幕数が倍。

・ いーえつくすか EX化について

通常状態で使っている能力とは違う、別の能力を発現させること。

または、能力を発揮させた状態。

覚醒状態ということもある。

ノーマルで登場していたキャラが、別能力を発動させたときに使うキャラ設定上で別の能力がある場合に「EX化」といい、急激に攻撃が激しくなる。

「発狂状態」とは区別される。

二次創作作品で、オリジナルの能力を発動させる場合でもEX化とということがあるが、この小説の主人公の場合は“覚醒化”と予定。

因みに代表的な人物は“上白沢慧音”だけらしい。

EXルーミアと言う存在も確認されているが、二次創作設定らしいので統一されていない。

統一されている設定。

(容姿)

? 大人っぽいプロポーションになる。

? 髪形がロングまたはベリーロングになる。

? 背中に羽が生える。

? 闇の妖怪らしく、生える羽は漆黒。

? 逆に純白の羽が生えた場合はかなり不味いらしい……。

? カリスマが大幅に増量。

? 巨乳になる。

? 大きな十字剣を持つ。

? 刀身に対して柄や鍔の部分が長いデザインの剣。 聖者の十字架をイメージ。

? 剣は漆黒のことが多い。

? 基本的な服装は変わらないことが多い。

? 漆黒のドレスのまま。

尚、リボンが封印になっており、自ら外せる時もあるが誰かに外してもらった必要がある。

この小説の場合は、外してもらわなければならない。

専門的知識（後書き）

長い……。

因みにこの設定は一部を除いて借りてきた。

優しい青年の暴挙（前書き）

何も完結していない馬鹿の、何時もながらの暴走です。

優しい青年の暴挙

〈現代の何処か〉

青年は1人、生きてきた。

生まれた頃からでは無い。

ただ、姉夫婦は事故で死に両親は流行病で無くなった。

親戚は引き取ると言ってくれたが、青年は断った。

それから青年は高校を卒業した後、働いて働いて生きてきた。

そんな生活が2年続いた。

語弊がある。

働いて働いて“能力を使つて”生きてきたが正しい。

彼がこの能力　　あらゆる物・事を増減する程度の能力　　を

手に入れた出来事は、家族の死であった。

現実に絶望し、自ら命を絶とうと考えてた矢先の時だった。

彼は体力を増やし肉体労働をこなし、ダイエットの臨時講習の仕事
を請けた際受講者の体重を減らしたり、金を増やしたり地雷を減ら
したりして能力を使っていた。

彼は決して、自分の欲望を満たすために人に迷惑を掛ける事はしな
かった。

だが、それでも彼は“孤独”だった。

彼は孤独を嫌っていた、それなのに彼は優しすぎた存在だった。

自分では無く他人の悩み・悲しみ・憎しみを何とかしてあげたいと
考える、そんな青年だった。

表情・表面には出さないが、彼はそんな人間だった。

だからこそ、彼は“都市伝説”に縋りたかったのかもしれない。

PCで見たことのあるキーワード“東方Project”
全部を見た訳では無いが、隔離された世界“幻想郷”と言う世界があると言う事。

其処には少ない人間と“妖怪・神・妖精・亡霊・鬼”が住む世界と言う。

彼はそんな世界に行つて見たいと思った。

しかし、其処に行くには“忘れ去られる”と言う方法か“隙間妖怪”と言う存在に連れて行つて貰う以外に方法は無かった。

彼が其処に行きたいと強く願つたのは、家族の死だった。

もし家族が生きていたらこんな考えは若気の至りとなっていた筈だけれど、肉親が居なくなり孤独感に襲われた彼に縋るしか無かったのが幻想郷だった。

だからこそ、彼は親戚の引き取りを断り存在を忘れ去られようとした。

けど、結局上手く行かなくて

彼は幻想郷に行けなかった。

いつか行ける事を夢見て、生きてきた。

最早それは、妄信と言うべきか。

それでも彼は幻想郷に行く事を求めて止まない。

しかし、最早彼も手段を選ばずにはいられなかった。

「本当はこんな手段を使いたく無かったが……。」

前記にも記した通り、彼は私利私欲の為に人に迷惑を掛けたくないと考えるお人よしだった。

しかし、彼は限界だった。

だからこんな“暴挙”に出た。

幻想郷の存在を“増やし”、俺の存在を“減らす”！

彼がそう念じようとした時。

くぱあ！

足元に“スキマ”が開いた。

青年は居なくなった。

幻想入りを果たした。

ただそれだけ。

優しい青年の暴挙（後書き）

今回は頭の中で自己完結しない。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何こねえ？(前書き)

落ちる〜落ちる〜 俺達〜

名前は今回で解る筈。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？

（スキマ内）

彼は落ちている。

何処までも何処までも落ちていく。

不意に浮遊感に包まれた。

「ここは……？」

そう呟いた時、背後から声がした。

「ここはスキマの中よ。」

彼が振り返る。

其処に居たのは、金髪で帽子らしき物を被り、傘を持っている女性

（少女？）が佇んでいた。

「まったく、幻想郷の存在を増やそうなんて、何を考えているのか

しら？ねえ、「愚者」さん？」

「……何で愚者？」

彼は疑問を口にし、女性は笑み
げる。

仮面の

を浮かべよう告

「それはそうよ。だって貴方

」

幻想郷を“消滅”させようとしたのよ？

驚くほど冷たい声。

顔は笑顔なのがさらに恐怖を煽る。
そんな状況の中、彼が取った行動。
それは

「え？」

彼は地面に頭を付け、ひれ伏した。
土下座である。

「すまなかつた。」

心底詫びる声で謝る青年。

毒気を抜かれた女性は、啞然としたが直ぐに平常になり質問をした。

「謝る位ならしなれば良いと思うのに……。」

「まったく持つてその通りだ、返す言葉も無い。」

女性は思った。

この男、あんな大それた事をしようとしながら此処まで謝ると言う事は

「貴方は幻想郷に来たかったのかしら？」

ビクリッ！と彼が身体を震わせる。

その様子は、母親に叱られる前の子供に見えた。

女性はため息を付きながら、理解した。

（様は幻想入りしたくて、でも出来なくて仕方なくって所かしらね。）

女性はこの青年をどうするか決めかねていた。

幻想郷を消す力を持つ存在を受け入れる、それはかなり危険な賭けね

けれど、女性の答えは決まっていた。

「良いわ、許してあげる。」

「……………え？」

「正し、条件を付けるわ。」

「条件？」

其処まで言って女性はもったいぶる様な 悪戯を思いついた子供の様な 素振りを見せる。

「……………条件は？」

「条件は……………」

幻想郷の起爆剤、もしくは投じられた一石になる事

それが女性の条件だった。

注意事項も付いてくる。

「正し、外の技術を広めない事。里の人間が外の世界に興味を持ち始めたら幻想郷は消滅する。」

「何故？」

「簡単な話よ。幻想郷は元々行き場を失った妖怪達の最後の樂園なのよ。外の技術が発展すると共に妖怪は存在しない生き物となった。いえ、“最初から居なかつた”とされてしまったが正しいかしら。」

「……………現代社会が妖怪を追放したって訳か……………」

「幻想郷に人間が居る理由も知りたいかしら？」

試す様な目で女性は問う。
青年はその目を逸らさず答える。

「是非。」

「よろしい。本来妖怪は“人の恐怖”から生まれた存在であり、人が恐怖しなければ妖怪は存在しない事になる。だから妖怪は人を襲い、人は妖怪を恐怖した。」

「幻想郷は“人間を飼い殺す”世界って事か？」

「……間違いでは無いわね。幻想郷は人と妖怪が共存してる世界とは言っけれど、実際は妖怪が人間を見下している様な物ね。もつとも最近はその認識を改めてはいるけれど、全員がそう思っている訳では無いのよ。」

「だからあんたは俺に起爆剤になれって言ったのか。そういった確執を無くし、平等で対等な世界を作らせる為の。」

「まあ、幻想郷内で悩み・苦しんでいる人や妖怪を助けても問題ないわ。」

青年はふと思う事がある。

「なあ、俺は“危険”じゃないか？」

「……………」

作り笑いを浮かべ、黙する。

「正直に言ってくれないか？」

真剣な眼差し。

女性は表情を何とも言え無い顔にする。

「正直言っつて、貴方は危険よ。危険所じゃない、下手すれば“爆弾

”を抱える様な物よ。」

「なら、何で……。」

「……それはね、幻想郷が“全てを受け入れる”からよ。」

もつとも、最初から危険な奴は入る前、入った後滅するけどね

そう言っつて、とびきりの笑顔を見せる。

「……それにね、似てるのよ貴方は。」

「似てる？」

「ええ、私の知り合いにね。」

後は、貴方が寂しそうな目をしていたからかしら

青年は目を見開く。

「何……で……!？」

「………解るわよ、長く生きてますもの。」

「………そうかい。」

「何があったか、何に絶望したかは聞かないでおくわ。」

「すまん……。」

その後、幻想郷について色々聞いたり、スペルカードルールなどを教えてもらった青年。

「ふう、久々に説明するから疲れちゃった。」

「あゝ、何かすまん。」

「良いわよ別に。しかし、貴方って謝ってばかりね。」

「………負い目があるからな。」

「それもそうね。」

「所でさ。」

「何かしら?」

「お互い自己紹介して無いよな?」

「うふふふふふふふ!」

「くくくくくくくく!」

2人して爆笑する。

それから互いに自己紹介をする。

「俺の名は直人。名字は捨てた。」

「私は八雲 紫と申します。」

「何故敬語?」

「ノリよ。」

そうして、そろそろ幻想入りするかと思いきや紫が質問してきた。

「貴方は夢とかあるのかしら?」

「……………下らない願望なら?。」

「お聞かせくださる?」

「勘弁して駄目……………。」

少し躊躇した後、蚊の鳴く様な声で“願望”を言った。

「……………一夫多妻。」

「……………」

紫は沈黙していた。

「な／＼／＼！わ、悪いかよ!？」

「……………」

「何だよその笑い!？笑いたければ笑えば良いだろう!」

「いえね。別に深い意味は無いわよ?」

「嘘だ!」

「まあ、そこら辺は男の子って事で」

「俺は20だ!」

「あら以外!背が小さいから18歳かと。」

「うがあああ!」

直人は身悶えている!

「まあまあ、幻想郷には美人・美少女がいっぱい居るわよ?勿論私も美少女だけど」

「……………」

その瞬間、空気が死んだ。

地の底から聞こえてくる様な声で、紫が聞いてくる。

「何か文句でもあるのかしら?」

「イイエメツソウモナイ。」

とりあえず、いよいよ幻想入りする事となった直人。

「じゃあ、博麗神社に落とすわよ?」

「結界の管理する場所だっけ？」

「そうよ。……………今はまだ期待できないけど、期待してるって言わせなさい。」

「女たらしでも良いのなら。」

「ふふ。それじゃあお決まりの台詞を1つ。」

幻想郷へようこそ

くばあ！

直人の足元にスキマが開いた。

「落ちて行くのかあああああああああ！？」

「当たり前よ。私の素を見た代償よ。」

こうして、直人は幻想入りした。

スキマ・イン・ゲンソーキョウランド 何これえ？（後書き）

紫の口調がこれで合っているか心配な件。

今回の設定は元ネタがある。

ニコニコ動画『東方星母録』の出来事が元ネタ。

知りたければ見れば良いと思うが、超憂鬱展開があるから半端な気持ちで見ない事。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！（前書き）

博麗神社に落ちた直人。

空中から地上まで1m位。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！

（博麗神社・境内前）

此処は博麗神社。

結界の要の場所であり、“異変”を解決する巫女が住んでいる。

その名は“博麗 霊夢”と言う少女だ。

この少女、色々と怖い存在でもある。

異変解決の為なら原因らしき存在を倒し、行く手を阻む者や進路に立った者も倒して進む。

冷血・冷酷と言う訳では無いが、解決する為なら手段を選ばない。

もつとも、解決した後は宴会を神社で開く事が最近の日課になっている。

尚、彼女の神社は貧乏である。

…………… 自給自足をしていると言う噂もある。

そんな霊夢は今日も賽銭があるか確認した後、箒で境内前を掃いていた。

「ふう、最近暇ね……。参拝客も来ないし……。」

この前の異変“神霊廟異変”を解決したのだが、これと言って平穩が続いていた。

「ふう……。ん？」

その時、目の前にスキマが現れた。

ドスンッ！

そんな音が聞こえた。

スキマから何か落ちてきたのだ。

それは人間の男性だった。

「……………」。(ピクピクツ！)

顔面から落ちたので、かなり痛いと思う。

霊夢は警戒しながらも少し慌てながら安否を気遣った。

「だ、大丈夫？」

返事はこう返って来た。

「大丈夫……………だ……………、問題……………無い……………」

グツ！と親指を立てる直人。

「案外タフね。」

直人の隣に上半身をスキマから出している紫がツッコむ。

「ちよつと紫。これ何よ？」

「幻想入り希望者よ。」

「意味が解らないんだけど……………」

「まあまあ、どの道外の世界で能力が覚醒してたみたいだから、一応この世界に連れて来たのよ。」

「……………こいつの能力は？」

「……………あらゆる物・事を増減する程度の能力よ。」

霊夢は直人を見据える。

あの紫が幻想郷に危害を及ぼす存在を連れてきた？

霊夢にとってそれは考えもしない出来事だ。

「勿論条件付きだけどね。」

「条件？」

「まあ、幻想郷の今の確執を何とかして欲しいって言うね。」

「無理でしょ？紅魔館の面々は少し認識を改めているけど、野良妖怪はそうもいかないわよ？」

「だからこそよ、私はこの男の“可能性”を見てみたいのよ。」

扇子で口元を隠し微笑む。

「……………あんた、何か悪いものでも食べた？」

「失礼ねえ。ちゃんと藍の料理を食べてきました。」

「じゃあ何でこんな奴を信じるのよ？」

「そうね……、一目ぼれかしら」

「……………似合わない。」

「まあそれは冗談として、初対面の私の 殺気を放った私の

素を見たのよ？」

「珍しいわね。あんたが崩されるなんて。」

「自分のした事にちゃんと自覚を持ち、非があるのを理解して謝罪してきたのよ？信じるに値するわよ。」

「ふ〜ん……、それより何時までそいつはその状態なの？」

落下時からその体勢な直人。

まあ理由はだ。

「あ〜と……、なんかシリアスだったんで立つに立てなくなりました……………」

「はあ、まあ良いわ。私は博麗 霊夢、この神社の巫女よ。」

そう紹介されたので、直人は立ちあがり紹介を返す。

「直人だ。名字は捨てたので無い。」

「あら？何ですよ？」

「まつ、色々あつたんだよ。」

「八雲の名字居る？」

「謹んでお断りします。」

「あらつまらない。」

そんな会話をしてる内に、時刻は昼頃になった。

紫はスキマで家に帰った。

霊夢は紫に頼まれて直人を住まわす事にした。

「良い？雑用はやって貰うわよ？」

「解った。」

「しかし、とんだ暴拳に出たわね……………。其処までして幻想郷に来たかったなんて。」

「まあ、あつち少し息苦しいからな。」
「と言うか、女誑しって何よ。」
「悪いか？」
「襲ってきたら潰すわよ？」
「無理やりとか趣味じゃ無いからこつちから願ひ下げだよ。」
「ふう、食材足りたかしら？」
「無いの？」
「3日分しか無いのよ……。買い物行かなきゃ。」
「ちよつと食料見せて。」
「……1人締めは許さないわよ。」
「しないつての。」

〔博麗神社・台所〕

外の世界と同じ作りだった。
「何故に？」
「あのね、流石にそこら辺は普及してるわよ。」
「電気とか水道も？」
「ええ、たしか妖怪の山と霧の湖からかしらね。」
「何か凄い名前出てくるな。」
「覚えておいた方が良くわよ。後で教えてあげるから。」
「うい。」

直人は冷蔵庫を開けた。

「少ないな。」
「うるさいわね。家は貧乏なのよ。」
「酒を製造してるって紫さんから聞いたぞ？」
「それはそれ、これはこれ。」
「お約束だな。まあ良いや、とりあえず“増える”」
そう言うと、食材が“新品同様”になって増えていた。

博麗神社はいつも閑古鳥が鳴いている。それが現実！（後書き）

霊夢のキャラが崩壊してる様な……。

まあ良いか。

妖怪の恩恵があるから自給自足出来るらしいんだけど、誰かが貧乏とか言った所為で貧乏になったとか。

スターライトシューターの襲来！

〔博麗神社・縁側〕

直人が博麗の名字を

強制的に

授かり、神社に来てから

1日が経過した。

空き部屋だった所を直人の部屋にして貰った。

下着などは紫がスキマで送ってくれていた様で、直人の部屋に置いてあった。

そして、今日は神社の周りを掃除し終えたので縁側で茶を飲んでいた。

ズズツ

「ふう……。」

「今日も平和ねえ……。」

「平和で良くないか？」

「暇になるのよ。」

「そうかい。」

和んでいた、所に向かいの空に黒い影が見えた。

「あれ何？」

「あゝ、またたかりに来たわね……。」

「知り合い？」

「腐れ縁よ。」

「幻想郷の住人は空を飛べるとは聞いてたけど、本当なのか……。」

「直人も飛べるわよ。」

「そーなのかい。」

そんな会話をしてる内に、見る見る影は近づいてきて庭に降り立った。

「霊夢ー！茶を貰いに来たぜー！」

「帰れ。」

「うわ、身も蓋も無い。」

無常の言葉にツッコミを入れる直人。

金髪をしていて、どっかの魔法使いが被る帽子を被った、白いエプロンの下に黒い服を着た少女が直人に気づいた。

「あれ？お前誰だ？」

「俺の名前はん「博麗 直人よ。」ちよっ!？」

「へー、博麗……………ゑ？」

「もちつけ、色々と言いたいと思うがまず冷静になつて、結婚したのかお前等／＼／＼／＼／＼!……………こつなつたか……………」

「ち、違うわよ／＼／＼／＼!そんなんじゃ無いわよ!こいつの能力が便利だから博麗の名字をあげたのよ!」

「へ?能力?」

〈巫女説明中〉

「なるほど、その増減する能力で貧乏を脱出できるからか。」

「そついう事よ。」

「清しい程本音を隠さないな。」

「当たり前でしょう。」

「流石霊夢!無常だぜ!」

「褒めてどーする!？」

埒が明かないのでそろそろ名前を聞く事にした。

「あんたは誰なんだ？」

「ふっふっふ!良くぞ聞いてくれた!私の名前は幻想郷最そく「元でしょ。」……………霧雨 魔理沙、普通の魔法使いだぜ……………」

「霊夢!流石に酷いだろ!?元氣無くなつたぞ!？」

「あら御免なさい。長つたらしいのめんどくさいのよ。」

「鬼か!？」

「鬼は萃香よ。」
「誰だ!？」
「家に住み着いている鬼よ。」
「あははははは!」
魔理沙が笑い出した。

そんなこんなで夫婦漫才的なやりとりを終え、3人で茶を啜っていた。

「へー、脅迫地味た行動を取ろうとして幻想入りって凄いなだぜ。」
「下手すれば幻想郷が消えてただけだね。」

「……………すみません。」

「まあまあ、終わりよければ全て良しって言うじゃないか。」

「終わり良ければね……………」

「何故含みを入れたし。」

不意に直人は昨日霊夢から説明して貰った事を思い出した。

「なあ、俺も空を飛べるのか?」

「うーん、能力持ちは大抵飛べるんだけど……………」

「直人の能力で飛べないのか?」

「……………やってみる。」

直人は庭に立っている。

意識を集中させ、飛ぶイメージを浮かべる。

(しかし、能力を使って飛ぶって言われてもなあ……………)

その時、何かを思いついた。

(これなら行けるか?)

そしてある部分を増やす事にした。

浮遊感、浮遊力を“増やす”

瞬間。

フワッ

体が浮いた。

直人は恐る恐る目を開けると、神社の鳥井が見える高さまで“飛んでいた”。

「あ……。」

これが、幻想郷

そこから見える景色は、今まで見てきた中で一番思いでに残る景色だった。

不意に、隣から声が聞こえる。

「どう？幻想郷の景色は？」

「絶景だろ？」

いつの間にか隣に来ていた霊夢と魔理沙が聞いてきた。

その質問に直人はこう答えた。

「最高！」

「よろしい。」

「ははは！」

3人で笑いあった。

その後、地上に下りて今日1日は空を飛ぶ練習を少しやった後、“弾幕”の出し方と“弾幕ごっこ”の練習をする事になった。

スターライトシューターの襲来！（後書き）

幻想郷の景色見てみたいなあ……。

メール・感想があればよろしく。

弾幕ごっこ、それは技量と精神戦、そして弾幕の美しさと多様さ（前書き）

スペルカードルールは、幻想郷内での揉め事や紛争を解決するための手段とされており、人間と妖怪が対等に戦う場合や、強い妖怪同士が戦う場合に、必要以上に力を出さないようにする為の決闘ルールである。「命名決闘法」という呼び方もあり、技のほうを「カードアタック」と呼ぶこともある。

弾幕やスペルカードは「本当に花火と同じ」であり、名前を付けないと作品になりえない。

スペルカード - Wikiより抜粋。

正し、この小説では“殺す”事も視野に含まれる。

弹幕ごっこ、それは技量と精神戦、そして弹幕の美しさと同様さ

（境内前）

今現在、直人は弹幕ごっここの練習をする事になった。

「所で、弹幕出すにはどうすれば良いんだ？」

直人が尋ねる。

「そうね、基本は霊力が気力で出すのよ。」

「無えよ。」

「とりあえずやってみるんだぜ。」

「うい。」

直人は意識を集中させる、前に質問。

「形とかは？」

「そこは自分が思い描いたイメージよ。」

「と言っても、大体は自分にあつた形になるんだがな。」

「ふーん。」

改めてイメージをする。

形は“球状”で行こう

すると、直人の掌に“小さな球状弹幕”が出た。

「……………」

「……………ぷっ。」

「……………ぷくく。」

笑いを堪える2人。

「笑いたきゃ笑え……………」

その瞬間、笑い声が響いた。

それから数分後、笑い声も止み弹幕の大きさを試行錯誤していた。

霊夢と魔理沙はそれを見ている。

「しかし、何で小さいんだ？ 気力が少ないとか？」

「それなら威力は減って速さが遅くなるだけよ。大きさは関係無いわ。」

「じゃあ何でだろうな？」

「さあ？」

そんな2人の話をよそに、直人は1つの推測を建てていた。

（もしかしてこれ、増やすんじゃないか？ 大きさを増やすって念じれば出来そうだし。そういえば、霊力の“力”も増やせるんじゃないか？）

そう考えて直ぐに実行に移す。

形は球状で、大きさを増やし、霊力を増やす

すると、先程より大きな球状弾幕が出た。

魔理沙が歓喜をあげる。

「おお！ 出来たじゃないか！」

褒める魔理沙の横で、霊夢が直人に質問した。

「どうやったの？」

「いや、増やしたんだ。」

「増やした？」

「ああ、大きさを増やした。 霊力とかもな。」

「…………… 霊力を増やした？」

「な、何か不味いか？」

「ねえ、それって“魔力”も増やせるの？」

その言葉に魔理沙が反応する。

「おいおい霊夢、流石に魔力が無い人間に増やせる訳ないだろう。」

「…………… いや、多分出来ると思う。」

「え？ 出来るのか？」

魔理沙の質問に対し、直人は自分の考えを言う。

「物体とかは一部が無ければ増やせないけど、自分自身を増やす場合は0でも増やす事は出来るんだよ。前に身体能力を増やすって増やしたとき、試した力があつたんだ。」

「それは？」

「予知能力。」

「何でそんな能力を試したのよ……。」

「いや、宝くじでも当たるかなあって……。」

「で、結局どうなったんだ？」

「増やせたんだよ。結局怖くなって止めたけど。」

「怖くなつた？」

「霊夢が以外そうに聞いてくる。」

「能力に溺れそうになりそうだからね。」

「なるほど。」

「所で、何時までその弾幕を出しているんだ？」

「直人の球状の弾幕が未だ其処に存在している。」

「何か的とか無い？」

「じゃあ、其処の岩を壊して。」

「何で岩があるんだぜ？」

「萃香が酔って持ってきた。」

「じゃあさ、威力を何処まで増やせるか試して良い。」

「神社に被害が無い程度にね。」

「解つた。」

「そして、増やす事30秒。」

「じゃあ、行くぞ！」

「手を前にかざし、撃つ！」

「ビュン！」

「ポーンッ！」

凄い速さと圧倒的な威力で岩が粉碎された。

『……………』

これには3人、開いた口が塞がらなかった。

不意に、霊夢が言った。

「威力を増やす場合は10秒までね。」

「了解。^{アイサー}」

「しかし、凄い威力だぜ……。フランよりあるんじゃないか？」

「誰だ？」

「吸血鬼の妹だぜ。」

「吸血鬼なんて居るのか。」

「行って見たいか？」

「うーん、今日は霧の湖って所行きたいんだが……。」

「じゃあ大丈夫だ！湖の近くに住んでいるからな。」

「じゃあ時間があったら行こうかな。」

「よし！私が案内してやるぜ！」と言う事で、こいつ借りてくぜ！」

「ちゃんと返さないよ。」

「物じゃ無いんだが……。」

こうして、霧の湖に行く事になった直人。

其処にはどんな出会いが待っているだろうか？

弾幕ごっこ、それは技量と精神戦、そして弾幕の美しさと同様さ（後書き）

因みに、直人の能力の真髄はまだこんなものじゃ無い。

霧の湖に住む者達とその友人達（前書き）

とりあえず、今回は？に定評があるバカルテットが出てくる予定。
大妖精も出る。

魔理沙の必需品

・魔法の筈

魔法使いの必需品

・ミニ八卦炉

魔力を燃料とする小さな火炉で、一晩じっくり煮込むようなト口火から山一つ焼き払える異常な火力まで調節が利くという。マスタースパークもミニ八卦炉に呪文をかけて使用している。

伝説の金属または合金の緋々色金ヒイロカネで出来ている。

・お手製魔法爆弾

魔理沙が作った爆弾。

帽子やスカートの中などに隠し持っている。

霧の湖に住む者達とその友人達

く上空・霧の湖付近く

直人と魔理沙は現在、空を飛んでいた。

「な、もう少しスピード上げようぜ？」

「無茶言うなよ……、今の季節が春過ぎだからって流石に寒い。」
季節は春が過ぎて少し経った頃だった。

リリーホワイトが居るか居ないかの境界線をつろついていると理解して欲しい。

兎も角、2人は霧の湖に向っていた。

しばらくして、霧が出ている大きな湖が見えた。

「お、！凄いな……！」

「だろ？」

「何故えぼる？」

「ノリだぜ！」

「へー。」

「何だよその気の抜ける返事は……。」

「とりあえず降りてみるか。」

「無視かい！」

2人は湖に降り立った。

辺りは霧が出ており、視界は良好とは言え無い。

「いつも霧が出てるのか？」

「いや、流石に向こうが見えないほど霧は出ない筈なんだが……。」

その時、前方から氷が“飛んできた”！

「!?？」

魔理沙はそのまま横に避け、直人は3秒増幅させた弾幕を放つ。

パリンッ！

氷は粉々に砕け散る。

「何だ！？」

「……おいチルノ！行き成り何しやがる！」

魔理沙は氷を投げた犯人の名前を言う。

その質問に答えは返って来ない。

様子がおかしいと感じた魔理沙は、ミニ八卦炉構えながら霧の向こうに近づく。

すると、直人が何かに気づいた。

「なあ。」

「何だ？」

「もしかして、あそこに居ないか？」

「何処だぜ？」

直人が指差す方向を見ると、チルノ達は直人達の右側

湖の対

岸　　で野球をしていた。

「でも、何で前から？」

「あ、今凍りの塊が打たれた。」

その打たれた氷は霧に入り、何かぶつかりながらこちらに近づいてくる音を出す。

「まさか……。」

その言葉を放った後、氷が先程と同じように霧から出てきた。

直人はその場を離れていたのだから氷はそのまま直進して消えた。

「マジでか……。」

「とりあえず、行ってみよう。」

直人達は野球をやっているチルノ達の元に来ていた。

チルノは悔しそうに、緑色の髪をしていて　　触覚が出ている

羽を生やした少女に文句を言う。

「ムキー！何で簡単に打つのだよ！リグル！」

リグルと呼ばれた少女は困った顔をする。

「いや、打たないとゲームにならないから。」

その隣から　黒い服を着ていて、眼は赤く、髪は黄色、髪の毛に赤いリボンを巻いている　幼い少女が会話に混ざる。

「チルノの弾は真っ直ぐだから打ち易いのだ！」

両手を大きく広げてチルノに厳しい言葉を掛ける少女　ルーミア。
ア。

「うう。だってアタイは変化球苦手だし。」

「大丈夫だよチルノちゃん！練習すればきっと出来るよ！」

「そうよね！天才のアタイに不可能は無いわ！ありがとう！大ちゃん！」

「どういたしまして！……って、天才は関係無いよ！？」

大ちゃんと呼ばれた緑髪の少女　大妖精は的確にツツコミを入れる。

その時、向こうから歌いながら喋る少女が声を掛けてきた。

「みんな〜　八目鰻やおでんが出来たわよ〜」

夜雀の翼を生やす少女　ミステリアが呼びかけた。

直人と魔理沙は毒気を抜かれていた。

「どーする？怒るに怒れないよ？」

うーんと唸る魔理沙。

「故意じゃ無いからなあ……。」

そう考えている時、大ちゃんが直人達に気づく。

「あれ？あそこに居るの魔理沙さんと……、誰？」

4人も一斉に魔理沙の隣に居る直人を見る。

「本当だ。誰だろう？」

「里の人間にしては随分珍しい服装ねえ。」

「食べても良い人類かー？」

3人が口々に疑問を出し合う中、チルノが直人達に近づいた。

「やい！そこのお前！」

行き成りチルノに話しかけられ、直人は驚いた。

「うお！？な、何だ？」

驚いたが、冷静に返事した。

「アタイとしょーぶしろ！」

「ええー？」

その言動を聞いていた大ちゃんが慌てて止めに入る。

「止めようよチルノちゃん！初対面の人に何でもかんでも喧嘩売っちゃ駄目だつて慧音先生に言われたじゃない！」

「止めないで大ちゃん！アタイはさいきょーだから、こんな弱そうな男に負けたりはしないわ！」

「流石に弱そうは無いだろ……。」

直人はため息を付く。

しかし、チルノに助け舟を出したのは魔理沙だった。

「良いじゃないか！戦ってみるよ！」

「うおい！」

「よし！なら早速始めるわよ！」

チルノはカードを取り出し、宣言する。

「ちよ」

「氷符『アイシクルフォール』！」

瞬間、チルノの両手から氷弾が放たれる！左右から挟みこむように撃たれている。

しかし、至近距離にも関わらず、攻撃は当たらなかつた。何故なら。

“真ん中には氷弾が飛んでこないからだった”。

「……………」

霧の湖に住む者達とその友人達（後書き）

次回は紅魔館に行けたら良いなあ。

メールとか感想とかください。

霊夢「賽銭もね！」

帰れ。

妖精達と湖で過ごすのは一時の安らぎであり、次に進む為の休息でもある。

(前

直人のスペルカードは紅魔館を“本当の大団円”後である。

まあ、基本チートに近い能力なので制限である。

妖精達と湖で過ごすのは一時の安らぎであり、次に進む為の休息でもある。

〈霧の湖〉

直人達は屋台で八目鰻を食べていた。

「何でこんな弱そうな奴に負けるのかな？」

「弱そう言っな。」

「まあまあ、身体能力を上げなきゃ弱いじゃないか。」

「うぐっ!？」

上からチルノ・直人・魔理沙の会話。

因みに魔理沙は、直人が戦ってる間に直人の詳細をミスティア達に教えていた。

…………… 女たらしも含めて。

「見た感じ大人しそうなのに、以外に狼？」

「肉食なのかー？」

「近づいちゃ駄目よ。」

「ちよつとミスチャーちゃん!? 言い過ぎだよ!？」

「魔理沙あああああああ!!!!!!」

「ははははははははははは!!!!!!」

「おんなたらしって何？」

ワイワイガヤガヤッ!

その後、色々からかわれたり再戦を申し込まれたりした過ごした。気づけば日が高い所に上っていた。

時刻：3：00

直人は魔理沙の用事を聞いた。

「行かないのか？紅魔館つて所。」

「おおっと！そうだったぜ！」

「忘れてたのかよ……。」

そしてミスティアに代金を払った。

因みに能力で増やして渡したのでかなり驚かれた。

「わぁ！」

「凄い！」

「しかもこれ新しいよ！」

「そーなのかー！」

そんな感じで賞賛を浴びてたら、チルノが拳手をする。

「ふん！アタイもそれくらい出来るわよ！」

「いや、流石に無理なんじゃ……。」

「さいきよーのアタイに不可能は無いわよ！」

直人は内心やれやれつとため息を付きながら、チルノの手伝いをする。

「行くわよ！」

チルノがお金を持ち増やそうと念じる素振りをする。

チャリンツ！チャリンツ！チャリンツ！

金が増えた。

『凄ーい！』

6人 内2人は合わせて は歓喜の声を上げる。

「やっぱりアタイつたらさいきよーね！」

そんな中、直人達は紅魔館に向う準備をする。

その様子にチルノが気がつく。

「ちよつと！何処行くのよ！」

「ああ、ちよつと紅魔館まで。」

その言葉にチルノとルーミア以外が声を上げる。

『ええ！？』

「と言う訳だ、私達は行くぜ！」

「またな！八目鰻美味しかったよ。」

そう言つて空を飛ばうとした時、チルノが言った。

「アタイも行くわ！」

「私も〜！」

これには全員驚いた。

『何故！？』

その疑問に対する返答はこうだ。

「アタイが居れば問題ありよ！」

「面白そうだから〜！」

「チルノは問題あるのかい！ルミアは面白半分かよ！？」

ツッコミが冴え渡る。

まあ、何かあつても護れば問題ないとは思つが不安ではある。

「大丈夫よ！なおとは弱そうだけど、アタイが助けてあげるわ！」

「勝つてから言え。」

「う……………」

「……………約束してくないか？」

「え？」

不意に直人はこう言った。

「危なくなつたら逃げる事。それが約束な。」

「でも、アタイが居れば……………」

「万が一もあるからな。で、どうする？」

「……………解つたわ、でもあんたも約束しなさい！」

「何を？」

「アタイと“友達”になりなさい！」

言葉が詰まった

(友人を置いていった自分に友達になれって…。)

動揺してる時、魔理沙がこう言った。

「何言ってるんだぜ？もう直人とチルノ達は友達だろ？」

その言葉は直人の心に響いた。

だからこそ、直人はチルノ達にこう言った。

「そうだな、チルノや大ちゃん、リグルにミスチーにルーミアは俺の友達だな。」

その答えに5人は笑顔を浮かべ笑った。

その後、何故か他の3名も着いてくる事になり、紅魔館へ向った。

妖精達と湖で過ごすのは一時の安らぎであり、次に進む為の休息でもある。

(後

次回こそわあああ!!!!

紅魔館へ行くぜ!

紅魔館：中国妖怪の門番は眠れる龍（前書き）

紅 美鈴さんの出番です。

パーティーメンバー

直人・魔理沙・チルノ・大妖精・リグル・ミスティア・ルーミア

弾幕ごっこも入れるが、そうじゃないバトル要素も入れる。

紅魔館：中国妖怪の門番は眠れる龍

く上空・紅魔館付近く

直人達は紅魔館に向っていた。

「そういえばさ、紅魔館って吸血鬼の他に住んでいる人居ないのか？」

魔理沙が答える。

「居るぜ。中国だろ？パチュリーに小悪魔に咲夜つてのが住んでるだけ？」

「あのお、中国つてもしかして美鈴さんの事じゃあ……。」
「大ちゃんがおずおずと訂正する。」

「何で外の世界の国名で呼ばれているんだよ……。」
「へえ、外の世界の国名だったか。いつも中国つて呼ばれているから気にしなかったぜ。」

「不憫な……。」

直人が不憫に思っている時、チルノが声を掛けた。

「ほら！見えてきたよ！」

「相変わらず”紅い”わね……。」

「目が痛い……。」

紅魔館、幻想郷の「妖怪の山」の麓、「霧の湖」の畔に建つ洋館であり、その外観は全体的に紅い色調をしていて、館の前の道も一面の紅になっている。

さながら、「ブラッドロード（血の道）」と呼べるだろう。

時計台もあり、夜中12時にのみ鐘がなる

余談だが、この館の主“レミリア・スカーレット”は実例年齢は大人以上だが精神年齢は“子供”なので、館を実質取り仕切っている

のはメイド長の十六夜咲夜である。門番として紅美鈴がおり、湖側から館の敷地に進入しようとしてくる妖精などに対して積極的に迎撃を加えている。レミリアの妹であるランドール・スカーレットも館内におり、他にも多数の妖精がメイドとして在住している。館内は咲夜が空間をいじって見た目以上に広くなっている。

「説明ありがとうミスチー。」

「どういたしまして。」

「でも何で知ってるの？」

「慧音先生の授業で阿求って女の子が来て教えてくれたのよ。」

「何でも幻想郷の歴史を全て覚えていらっしゃるのーだー。」

脱空気を回避する為にルーミアが捕捉を入れてくれる。

……… 此処だけの話、美鈴は門番専門だけではなく、花畑管理の庭師でもある。

そんなこんなで、紅魔館に到着する。

〔紅魔館・門前〕

日が少し傾いてきた頃、直人達は門前の着地した。

「ふう……。」

「なんだ？疲れたのか？」

「いや、そういう訳じゃ無いんだが……。」

空気がおかしい

直人の第一印象はそんな感じだった。

どうやら魔理沙も何かを感じ取ったらしい。

「何だ？何か変な感じが……。」

そして、その原因が解った！

それは

美鈴が起きているからだ

「ちょっと待ってくださいよ!? 何ですか! 私が起きていてはいけませんか!？」

美鈴のツツコミに全員の返事はこつだった。

『うん!』

「ひ、酷い……。」

よよよ……、と泣き崩れる美鈴を無視して館に入ろうとした、が。

「つて!? 何勝手に入ろうとしてるんですか!？」

『チツ!』

「舌打ち!？」

何と言うネタのオンパレード。

「もうネタはいいですから!」

とりあえず、美鈴は決まり文句を言う。

「とりあえず、様の無い方はお帰りください。特に魔理沙。」

「私が何をしたって言うんだぜ?」

「パチユリー様の本を盗んでいつてるでしょう!」

直人は魔理沙を 超白い目で 見る。

「魔理沙……、お前って奴あ……。」

「ち、違つんだぜ!? 借りてるんだぜ!？」

「死んだら返す! 盗みでしょう!」

「うわあ……。」

少し引く。

「頼むから引くな!？」

「まあ漫才は置いて。」「

「うおい!？」

直人が美鈴を見る。

「……そういえば、貴方は誰ですか？」

「外来人の直人だ。故あつて博麗神社に住んでいるんだ。」「

「へへ、あの巫女の所にですか……。食費が削られていそうですね。」「

その言葉に魔理沙が捕捉を入れる。

「所がどっこい!こいつの能力のお陰で貧乏&食料危機を脱出したんだぜ!」「

『ナ!ナンダッテ!』

当事者と事情を知る者以外、全員驚いていた。

何故か幻想郷の終わりだとか、明日はお札が降ってくるとか声が聞こえる。

そんな中、美鈴は何故か満面の笑みを浮かべた。

「直人さんでしたよね?」「

「そうだけど。」「

「では、私と闘いませんか?」「

「おお!珍しいな、温厚なお前が自分から勝負を仕掛けるなんて。」「

「ええ、あの巫女の貧乏を救ったと言う能力を見てみたいですからね!」「

「いやまあ、良いけど。勝負は弾幕で?」「

「そうですね、後は接近戦でも良いですか?」「

直人はその言葉の意味を
悟られ無い様に
考えずに返答
した。

「良いよ。」「

「おい、待て。」「

魔理沙の声は続かなかった。

何故なら。

美鈴が全速力で直人に迫っていたのだから

不意打ちとも言えるその行動は、誰もが目を見張らせる。

ドゴッ！

終わった

誰もが思った時、驚愕をしていたのは美鈴だった。

「……な……！」

「危ねえ……。」

直人は美鈴の突きを“受け止めていた”。

美鈴は妖怪の中でも接近戦だけなら大妖怪でも互角に戦える。

それなのに唯の人間が妖怪の一撃を素手で受け止めると言う事は、

かなり異常な事だ。

美鈴の思考が混乱している内に、直人は美鈴の腕を掴み遠心力よりしくで投げた。

「くっ！」

すかさず空中に浮き、体勢を整えようとした時に直人が眼前に迫っていた。

思わずカードを発動。

「華符『芳華絢爛』！」

2色の全方位弾による弾幕が直人に殺到する！

ビュンッ！ビュンッ！ビュンッ！

速度も速い方なので、直人は美鈴の追撃を諦めて弾幕を見据える。
「減ろ！」

その言葉と共に、弾幕の数が減っていき1つしか残らなかった。
その弾幕を避ける。

美鈴は直人がした事を見て、何らかの能力を使用したと判断する。
（なるほど、何かを減らす能力ですか……。あれ？それだと霊夢の
貧乏が無くなると言うのはおかしい様な……。）
未だ確信を持ってない美鈴に対し、直人は弾幕を放った。
「あらよつと！」

小さな弾幕が1つ発射される。
しかし、その速度は速い。

「舐められたものですね！そんな小さな弾幕を避けられないと
」

美鈴が油断をしているその瞬間、直人は叫ぶ。

「増える！」

「!?!」

小さな弾幕が見る見る内に増えていく。

その数は小さいと言えど100は超えた。

「そういう能力ですか！」
大方の予想は付いた、後はこの弾幕を乗り切れれば勝機はあると判断
する美鈴。

「華符『破山砲』！」

虹色のエネルギーを放出させな斜め上にパンチを放つ。

ドゴオオオオンッ！

斜め上から迫っていた弾幕が消し飛んだ！

「……………」

「行きますよ！」

突破口を開き直人に接近する。

直人は何もせず、美鈴を見つめる。

「諦めましたか！」

「そうだな、唯の女たらしが此処までやれるとは思わなかったよ。」

「そうですか、以外に獣みたいでしたね！」

そしてそのまま斜め蹴りに入る。

「これで終わりです！」

「油断大敵だぜ？」

「え？」

その瞬間、美鈴の身体から力が抜けた。

浮遊感も徐々に抜けていく。

「きゃあ!？」

そのまま落下した。

（ぶつかる！）

そう思い、目を閉じる。

ガッ！

直人が受け止めた。

「大丈夫か？」

「……………え？え？」

状況が判断できないが、徐々に理解した様で。

「~~~~ ¥¥¥¥¥¥¥¥」

「いや赤くなるなよ……。」

「お、降ろしてください！」

「はいはいっと。」

ゆっくりと美鈴を降ろす。

美鈴はまだパニック状態だった。

(まさか……“お姫様抱っこ”で受け止められるなんて……)

流石にそんな経験は無かったので、顔を赤くする美鈴。

こうして、この戦いは直人の勝利で終わった。

因みに、直人が美鈴をお姫様抱っこで受け止めた時、女子6名は何故か不機嫌になったのは余談である。

紅魔館・中国妖怪の門番は眠れる龍（後書き）

うん、長い。

感想くれ。

紅魔館：完全に瀟洒なメイドの思惑（前書き）

十六夜 咲夜さんの出番です。

因みにパツd

「時よ……！！！！」

ゴーンッ！

ヒュンッ！ヒュンッ！ヒュンッ！

アーーーーー

！……………！！

紅魔館：完全で瀟洒なメイドの思惑

〔紅魔館・門前〕

美鈴に勝利したのだが、6名に機嫌が悪くなっている事に気がつく。

「ど、どうした？」

「何でもないんだぜ！」

「何でもありません！」

「何でもない！」

「他に同じく！」

「同じく！」

「お腹空いたから食べても良い？（超笑顔）」

「……………俺が何をしたら……………」

因みに上から、直人・魔理沙・大妖精・チルノ・ミスティア・リグル・ルーミアです。

そんな光景を少し羨ましそうに見ている美鈴の横から声が掛かる。

「何をやってるの中国？」

「中国じゃありません……………って、咲夜さん！？」

突如現れた女性は メイド長は 咲夜だった。

「まったく、接近戦を得意とする貴女が負けるなんて……………」

「うう……………、すみません……………」

「まあ良いわ。……………大方の予想がつくし。それで、どんな能力が解った？」

「はい、どうやら増やしたり減らしたり出来る能力かと思えます。」

「能力の範囲は？」

「恐らくほぼ可能かと。」

「ふむ……………」

咲夜は考えた。

（お嬢様の“運命”では、今日も魔理沙が本を盗みに来るって言うておられたけど……。）

見慣れぬ男と見慣れた妖精達が魔理沙と共にやって来た。そして、その男は美鈴を倒した。

能力は増やし減らす事が出来て、制限がほぼ無い。

この言葉からとある事を画策する。

「門を開けなさい美鈴。」

「良いんですか？」

「ええ、お嬢様の能力ですら読めなかった人物ならお嬢様の退屈も凌げるでしょう。」

「解りました。しかし直人さんって女たらしだったとは……。」

「あら？そうなの？」

「見たいですよ？」

「毒牙に掛かったのかしらね？」

「聞こえてますよお二人さん。」

直人がツツコミを入れた。

とりあえず、直人はいつの間にか現れた咲夜に質問する。

「あんたは誰だ？」

「これは失礼。紅魔館でメイド長を勤めさせてもらっております、十六夜咲夜と申します。以後お見知りおきを。」

優雅に自己紹介をする咲夜。

その動きに無駄が無い。

「メイドらしい紹介だぜ……。」

「余りやらないからね。」

魔理沙の驚いた感想に咲夜は悪戯っぽく返す。

そんな中、直人も咲夜程では無いが自己紹介をする。

「これはこれのご丁寧に、私目は直人と申します。今は故あって博麗神社に住んでいる居候の身でございます。以後お見知りおきを。」
優雅では無いが、それなりに様になっていた。

「こっちはこっちで礼儀正しい感じだな。」
「いや、流石に慣れないな。」
とまあこんな会話。

その後、屋敷の中に入れてもらう事になったが、魔理沙は強制連行だった。

「何で私まで行かなきゃならないんだぜ？」

「また本を盗むからよ。」

「借りているだけだぜ？」

「死んだら返すってそんなに待てないわよ。」

「せつかちな奴だな。」

「何と言うか、魔理沙の人間性が解ったよ……。」

「どーという意味だ。」

とまあ案内されながら進む。

チルノ達も内装をみて色々感想を言っている。

因みに直人込みで館内に入った時の第一感想は『紅い！』だった。

しばらくして、少し大きな扉の前で止まった。

「此処がお嬢様のお部屋です。」

「此処が……。」

「決して粗相の無いように。」

そう言つて、咲夜は消えた。

「なあ魔理沙。」

「何だ？」

「咲夜さんの能力って何？」

「時間を操る程度の能力だぜ。または時を止める程度の能力だぜ。」

「戻せる事は？」

「出来ないらしいぜ。」

会話を終え、目の前の部屋をノックする。

コンコン。

「……………開いているわ。」

「失礼しますよ。」

そして、直人は出会った。

永遠に紅い幼き月に

紅魔館：完全で瀟洒なメイドの思惑（後書き）

咲夜さん、何かを企む。

レミリアは次回に出せたら出したい。

感想寄せ！

紅魔館・永遠に紅い幼き月の疑問（前書き）

レミリア・スカーレットの定番。

さて、ネタが微妙に無い。

紅魔館：永遠に紅い幼き月の疑問

（紅魔館・レミリアの寝室）

直人は少し驚いていた。

「あんたが……レミリアか？」

そう疑問を投げかける。

何故なら 見た目幼女だから。

「……………（ギロツ！）」

ひっ!?

「いや、地の文に突っ込むなよ……。」

魔理沙が呆れて指摘する。

「あら失礼な所を見せたわね。 ようこそ、紅魔館へ。名も知

らぬ人間の男よ。」

「おやおや、これは失礼。名前を名乗り忘れていました。私の名前は直人と申します。以後お見知りおきを。」

礼儀には礼儀を返す。

まあ、ノリに合わせたと言う事だ。

「ふふつ。以外にノリが良いのね。」

「何となくやってみただけだよ。」

「あら、謙遜しなくても良いのに。」

……直人は別に意識してやっていなかったが、レミリアの背後には何故か黒い鬨気が出ていた。

「何でオーラが出てるの？」

ミスティアが疑問に思った。

「それで、この館に何をしに来たのかしら？」

レミリアの質問に対し直人はこう答えた。

「魔理沙の付き添い？」

「何で疑問なのよ……。」
呆れるレミリア。

「いや、本を借りに行くって魔理沙が言うから普通に借りに行くのかと思つて付いてきたんだけど……。」

「盗みに行くって事は知らなかったって訳ね。」

呆れ顔で魔理沙を見る7人。

「死んだら返すって。」

「あのねえ、あなたが盗んで行くからパチエの機嫌が悪いのよ。」

「魔理沙……。」

直人は最早言葉が出ない。

「と、兎も角だ！ 図書室に行かせて貰うぜ！」

そう言つて、魔理沙は箒に跨り勢い良く部屋を出て行った。

「止めなくて良いのか？」

「止められる程弱いなら、今此処に存在しないわ。」

「なるほど、つまり戦つた訳か。」

「何故そう思うの？」

「直感。」

「……ふはははは！ 面白いな直人よ。」

「何その無駄に溢れるカリスマな言葉遣い。」

「どうだ？ この館で働かないか？」

「スルーか。あと無理だから。」

「何故？」

「霊夢に全殺しにされる。」

「そう、残念ね。」

全然残念そうな素振りもせず、言葉を放つレミリア。

「とりあえず、魔理沙を止めてくる。」

「出来るの？」

「多分ね。それで、何処に行ったか解りますか？」

「この館には地下まであるのよ。その地下にある“大図書館”に居る筈よ。」

「うい。つー訳だ、手伝つてくれ。」

直人が振り向き、チルノ達に声を掛ける。

「アタイに任せなさい！」

「が、頑張ります！」

「そーなのかー。」

「まあ此処まで来ちゃったし。」

「そうね。」

5人の返事を確認し、部屋を後にする直人達。

部屋に残ったレミリアは、考え事をしていた。

あの男の“運命”が見えなかった。何故だ？

思考の迷路に迷う吸血鬼。

しかし、思いのほか直人の行動に驚かされるとは思いもしないと言
う事に、まだ気づかない。

紅魔館：永遠に紅い幼き月の疑問（後書き）

次回にご期待ください。

紅魔館：知識と日陰の少女の憂鬱と使い魔の本棚整理（前書き）

パチュリー・ノーレッジと小悪魔の出番。

今回の魔理沙はお仕置きされます。
尚、余りエロくは無いです。

「むきゅー？」

「無休？」

「待て、何だその言葉は？」

『何となく言ってみただけ（よ・なのだー）。』
「さいで。」

〈大図書館〉

中は悲惨だった。

本棚が倒れており、本が散乱している。

遠くに魔理沙が袋の中に本を入れている姿を捉えた。

「……………」

直人は能力を行使した。

すると、空中に飛んでいた魔理沙が徐々に落下していった。

「のわあああ!？」

ドンッ!

尻餅をついてしまう。

「くそー!何だっただけ!？」

「はいはい、終了な。」

直人が魔理沙に近づく。

小粒の弾幕を用意しながら。

「そ、その弾幕は何だぜ？」

「何、そろそろお灸を据えてやろうかと。」

「か、借りているんだぜ!？」

「とりあえずだ、今度は俺が居ないときに“借りに”来ることだな。」
弾幕が放たれた。

気絶する威力の弾幕を喰らった魔理沙を介抱し、先程のレーザー音の被害者が居る所に向う。

「魔理沙どうするの？」

ミスティアが質問する。

「縛って放置しておこう。」

「解ったのだ！」

ルーミアが縛り上げる。

「……………以外にS？」

「縛りプレイに興味ないけど。」

直人が淡々と返事する。

とりあえず、本の受付をするカウンターにやってくる。

直人が中を除くと、紫の帽子に紫の服、紫色の瞳と紫色の長い髪をした少女が目回して倒れている。

服装は何故かパジャマ ネグリジェっぽい 服を着ている。

耳を澄ますと何か聞こえる。

「むきゅー……………」

「何故に？」

「それが此処の七不思議だからです。」

大ちゃんが謎の発言をしたが、華麗にスルーした。

近くの本の山から誰か出てきた。

「痛た……………、パチュリー様大丈夫ですか？」

肩口にかかるくらいまでの長さはある紅い髪をしていて、頭と背中
に黒い羽を持ち、白い長袖と黒のベスト。

すそに沿って白のラインが2本入っている黒いロングスカートを着
ている女性だった。

「あゝ、此処の人か？」

「あれ、お客様ですか？」

「と言うより、馬鹿を止めました。」

魔理沙の方を指差す。

「え！？どうやって止めたんですか!？」

「能力を使つてな。とりあえず、そのパチュリーって子を介抱しないのか？」

「あ！そうでした!」

少ししてパチュリーが目を覚ました。

「お、目が覚めたか。」

そこら辺に落ちていた本を読んでいた直人。

他の5人も本を読んでいた　　内2人は弾幕ごっこをしようとしていたので滅した（笑）

「……誰？レミイの客？」

「ん〜、どちらかと言えば魔理沙の付き添いだっただが、泥棒紛いの事をするとは思わなかったんで伸しといた。」

「……そう、礼を言うべきかしらね。」

「気にするな。」

「そう……。」

ぺらっ……と本を捲る。

その後少しばかり自己紹介を交えて話をして過ごす。

「しかし、その能力は便利ね……。」

「まあね。一応、元本か一部があれば新しい形で増やせる事が出来るし。」

「それなら魔理沙が持つて行った本も増やせれば問題ないですね!」

3人の会話が弾む中、魔理沙が目を覚ました。

「う〜ん……、何故縛られているんだぜ？」

「あ、起きましたよ!」

大ちゃんが教えてくれた。

「とりあえず放置しといて。」

「うおい！？何でそうなるんだぜ！？」

「自業自得と因果応報だから。」

「意味が解らないぜ！？」

「ドンマイ。」

そんなやりとりを見ていたパチュリーが口を開く。

「直人……、貴方本の護人やらない？」

「ん〜、考えとくよ。」

「勘弁してくれ……。」

その時、勢い良く扉が開け放たれた。

バアアアアアン!!!!!!!!!!!!!!

「おっはよー！」

元気良く挨拶をする 495年の時を地下室で過して生きてきた吸血鬼の 少女だった。

紅魔館：知識と日陰の少女の憂鬱と使い魔の本棚整理（後書き）

次回が超シリアス

又は鬱展開

になるかもしれない。

とりあえず、山場。

メールか感想をください。

紅魔館：独りぼっちの悪魔の妹は、孤独な男と戯れる（前書き）

現在のお気に入り登録者：34名

こんな長続きしなそうな小説を読んでもくれている方々、ありがとうございます！

物語は佳境に入ると思う。

紅魔館：独りぼっちの悪魔の妹は、孤独な男と戯れる

（紅魔館・大図書館）

時刻：7時ジャスト

闇が轟き轟く時間帯。

その例に漏れず、吸血鬼の“妹”は起床してきた。

「あら、妹様。おはようございます。」

「こあ……、こんばんわで良いと思うわよ……。」

パチユリーと小悪魔の漫才を尻目に、魔理沙が慌てる。

「直人！今すぐ縄を解け！」

「何故に？」

「良いから！」

「リゲル、解いて。」

「はい。」

縄が解かれる。

「ふう、腕が痛いぜ。」

「はいはい。」

「いや、乙女の柔肌に傷が出来るってのは結構厳しいぜ？」

その発言に フラン含む 全員が疑問に思った。

（乙女？）

「……何だよその目は。」

「別に。」

とまあ、こんなやり取りをしている間にフランが近づいてくる

容姿は髪は薄い黄色をしており、七色に光る特徴的な形状の翼を

「じゃあ！始めよう！」

空中に浮くフラン。

そして放たれる“死刑宣告”。

逃げちゃ駄目だよ？怖がっちゃだよ？コワレチャダメダヨ？

その顔は、玩具おもちゃを手に入れた子供がする顔で、残酷なまでに狂気に満ちた顔だった。

「！」

その威圧が直人を襲う！

そして、フランから“スペルカードルを無視した弾幕”が放たれる！

ギュンツ！ギュンツ！ギュンツ！

3個の弾幕が直人に殺到する。

しかし、その攻撃は防がれた。

「恋符『ノンディレクショナルレーザー』！」

魔理沙を中心に複数のレーザーが発射され、弾幕を打ち貫く！

ボンツ！ボンツ！ボンツ！

フランは不機嫌な顔をして魔理沙を見る。

「ジャンシナイデヨ、マリサ。」

「そうは行かないぜ！今こいつは私が“借りて”いるんだからな！」

「直人も……盗むの……？」

「いや物じゃ無いし。」

「兎も角だ！借り物に傷でもつけたら霊夢に殺されそうだから、私が相手するぜ？」

そう言つて魔理沙はフランと対峙した、訳では無く。

直人が対峙した。

「お、おい！？」

「助かったよ魔理沙、ありがとう。でもな……。」

直人は少しイラついていた。

「いくら俺が弱いからって、やられっぱなしは趣味じゃ無い。」

下らない陳腐なプライド。

だが、それでもやらなければいけない事だった。

独りは俺だけで十分だ

何処か共通している、そう感じて眼を見た時理解した。

それは、孤独に蝕まれた眼だと言う事に。

今はマシだが、まだ濁っている。

そんな眼をしている少女を、何とかしてあげたいと思うのは彼の性分だ。

お人よしは死んでも直らない。

ただ、それだけ。

「さあ！踊りましょうか？お嬢さん？」

「アハハ ソウダネ！オドロウ！」

激闘が始まった。

紅魔館：独りぼっちの悪魔の妹は、孤独な男と戯れる（後書き）

鬱展開の第一段階終了。

第三段階に移行。

システムは正常。

現在の物語の完成度：0・05%

「さて、どう動くかな？」

紅魔館：鮮血必死の大舞踏会（前書き）

余談：クリスマスが近いので、クリスマス回でも書こうかなと思っ
たんだがこの小説の季節が春の終わりなので、番外編か次回に持ち
越そうかと考えている。

／／の反対が¥になってる件（泣）

顔文字苦手。

原曲：？U・N・オーエンは彼女なのか？が流れていると思っ
てく
ださい。

紅魔館：鮮血必死の大舞踏会

（紅魔館・大図書館）

フランの能力、それは“ありとあらゆるものを破壊する程度の能力”。

それ故に495年間、地下に幽閉された。

元々情緒不安定だったか、幽閉されてから情緒不安定になったか定かでは無いが、今現在の彼女は気が触れている状態だった。

バゴンツ！ドゴンツ！ズドンツ！

ギユンギユンギユンツツツ！！！！

破壊力のある弾幕が直人に殺到し、直人は華麗に避ける。

さながら道化の様に

「何て、冗談言ってる場合じゃねーか。」

現状ではまだ様子を見ている。

……視界の隅でパチユリーが絶望した表情を浮かべていたり、魔理沙が本を袋に詰め込んでいたり、チルノ達が倒れてくる本棚を必死で避けたりしているのは気のせいだと思う。

「アハハ オニゴツコハオモシロイネ！」

「鬼さんこちら、標的の方へってか！」

「ソウダネ！デモ、ソロソロ……ホンキデイクヨ！」

フランはカードを切る！

「禁忌『クランベリートラップ』！」

フランをの左上と右下に魔法陣を作られ、外周部に魔法陣を移動し挟み込むように弾幕が魔法陣から放たれる。

「マジか！」

能力を使用し、上空に逃げ込む。

しかし、フランは予測していたかのように弾幕を放つ。

「ぬわっ！？」

身体を捻り避ける。

「アレ？アタラナカッタヤ。」

「生憎と避ける事に関しては定評があるのだ。」

主に自称ではあるが。

「そらよっ！」

ポポポポポポポポポツツツツツ！！！！

ヒュンヒュンヒュンヒュンッ！！！！

小粒弾幕が素早く放たれる。

威力も吸血鬼ですら怯む威力だ。

しかし、それすら“破壊”する。

ブウウウウウンン！！！！

ボボボボボボンッ！

「な……！？」

「ザンネンデシタ」

フランの手に炎の剣が装備されている。

「ありかよそれ……。」

「ウン！禁忌『レーヴァテイン』ッテイウンダヨ。」

レーヴァテインとは、一般的に北欧神話に出てくる炎の巨人スルトが神々の黄昏・ラグナロクにおいて使用し、世界を焼き尽くし、新たな世界を作り上げた炎の剣の事。

「神話の剣を使うなよ……。」

しかし、凹んでいる場合じゃ無い。

唐突だが問題だ。

何故、直人は逃げまくっているでしょう？
簡単である。

ガクッ！

「！？」

「ふう、時間が掛かったな。」

直人はフランの浮遊力を“減らして”いたのだ。
もう一つも減らして。

フランが降りた所に行くと、こちらを睨みつけるフランが居た。

「ズルイヨ……。」

「何が？」

「トボケルナ！ノウリヨクヲツカッタンドロ！？」

「まあね。それで、どうする？」

その言葉を投げかけた時、フランは。

笑った

そして、自分の手の平を開き握る様な素振りを見せる。

「ワタシニハネ、“目”ガミエルノ。」

「目？」

「ソノ“目”ヲニギリツブセバネ、ナンデモコワセルンダヨ」

「なるほど、俺の“目”がその掌にあるのか。」

すまし顔で直人はフランを見る。

「何で……。」

「何が？」

「何で怖くならないの！？」

「何故と言われてもなあ。」

「普通は怖くなるんだよ！？自分が”死ぬ”かもしれないのに何で
!？」

「それは簡単だよ。」

直人は答える。
疑問に。

「君が優しい女の子だからさ。」

「え？」

フランには訳が解らなかった。

そんな混乱状態のフランに直人は言葉を放つ。

「君は、壊す事が嫌なんだろ？」

「……………どうしてそう思うの？」

「直感つてのもあるけど一番の理由は、君の瞳が悲しく見えたからかな？」

「悲しく見えた？」

「そう、壊したくないけれど壊したい、と言う衝動に葛藤する。そんな瞳だ。」

「貴方に何が解るのよ……………」

「何も、解らないな。」

「なら！知つたような口を聞かないでよ！高々1000年も生きていない人間に！私の気持ちを解つた様に思うな！」

フランは直人の“目”を潰す事が、出来なかった。

「何……………で……………？」

「……………生き物つて言うのはね、本能的にしたくない事を強制的にしない様に出来てるんだ。」

「本能的に……………？」

「そう、本能的にな。でもね、君は吸血鬼だ。本能的には破壊がしたいつてのもあると思う。でも、君の優しさもまた本能なんだよ。」

「私は……………、優しくなんか……………」

「……………もし、君が優しく無かったら君は一生独りぼっちだったと思っよ?」

「……………え?」

「君は独りじゃない筈だ、そうだろ?」

直人は無表情から、とびっきりの笑顔を見せる

その笑顔につられてフランも笑顔になる。

「そうだね、私は独りじゃ無いんだね。」

「そういう事さ、ほらあそこにいる妖精達を見てごらん。」

「?」

直人が指差す方向にはチルノ達があり、色々と笑いあったりしていた。

「あそこに混ざりたいかい?」

少し間を置いて、フランはこう答えた。

「……………うん!」

こうして、吸血鬼のお嬢様との“舞踏会”は終わった。

次は“姉妹の絆”を修復する事であった。

紅魔館・鮮血必死の大舞踏会（後書き）

これにて、フラン戦は終了です。
完全に俺設定って……。

誤字・脱字やメール・感想募集中！

紅魔館：孤独な男は罪悪を背負つ少女とワルツを踊る（前書き）

レミリア・スカーレットが再び劇に登場。

レミリアのカリスマがこの小説で崩壊するのは確定……、おや？誰
かk

「スピア・ザ・グングニル！」

ア-----!!!!!!!!!!!!!!

!!!!!!!!!!!!!!

紅魔館：孤独な男は罪悪を背負う少女とワルツを踊る

（紅魔館・大図書館）

フランがチルノ達と遊んでいる。

「……………」
「……………」

フランとチルノは動かない。

周りは固唾を呑んで見守っている。

……………約1名は金髪の上に帽子では無くタンコブを乗っけて倒れているが。

そして、時が動いた！

『最初はゲー！ジャンケン！ポンツ！』

フラン⇨ゲー チルノ⇨チヨキ

フランはにやつと笑み浮かべ、チルノは顔を青ざめる。

「あっち向いて、ホイッ！」

指が下に向けられると同時に、チルノは上を向く。

「むう……………」

「ふ、ふふーん！」

平和である。

〔紅魔館・2階廊下〕

直人はレミリアの部屋に向っていた。

「何処へ行かれるおつもりですか？」

後ろから声 メイド長、咲夜の声

が聞こえた。

「君の主の所、って言ったなら？」

首筋にナイフが突きつけられる

「……………何故、お嬢様の所に？」

ナイフの柄えに力を込めて問う。

「……………お節介だな。しかも、“大きなお世話”だ。」

「……………お嬢様が、それを望んでいるとでも？」

咲夜が陰しい声で尋ねる。

「望んじやいないだろうなあ。」

「ならば、何故です？」

直人はおどける様に しかし、真剣に 答えた。

「血の繋がった家族は互いに“1人”しか居ない。1人しか居ないのに、顔を会わせても挨拶程度しか話さない。悪いが俺は“我儘”

なんだよ。だから、俺は大きな世話を焼く。ただそれだけ。」

声ははつきりと放たれる。

「ならば……………、完全に瀟洒なメイドをどう切り抜ける気なんですか？」

首筋に血が少し、流れた。

しかし、急に咲夜の身体から力が抜ける。

「な……………!？」

「悪いが、あんたと遊んでいる暇も時間も状況でも無い。」

それに、約束もしちまったからな

直人がレミリアの部屋に向う前、フランの今までの事を聞いた。

曰く、姉が自分と会話をしてくれない。

曰く、姉は自分を束縛する。

曰く、姉は外に出ることを許さない。

直人は1つずつ、フランが少しだけ納得する様な返答をした。

1つ目の会話をしないのは、彼女に負い目があるからだと思うよ。

だって本当に会話をしたくないなら、フランを嚴重に封印して二度と出られない様にすると思うよ？

フランを閉じ込めていたと言う事実があるから、彼女は会話をしたくても出来ないんだと思うよ？

どうして？私は別に責めないよ？

フランが責めないって言っても、レミリアは責められるかもしれないと言う恐怖を感じているかもしれないからね。

2つ目については、3つ目も含めて同じ理由だね。

同じなの？

そう、同じ。

フランが危険な目に会わない様に、フランが罪を背負わない様に、そう思ってレミリアは君を束縛し、外に出さないんだと思うよ？

どうかなあ、あいつは自分が楽しければそれで良いって思ってるし。

かもしれないけど、それでもフランを心配してる筈だよ。

本当にいゝ？

本当だよ。

何でそんな自身を持って言えるの？

何でかって？それは

〔紅魔館・レミリアの寝室〕

レミリアは王座に座っていた。

紅茶を飲みながら。

「あら、止めてきてくれたのね。」

「まあな、流石に犯罪者の共犯は嫌だからね。」

「賢明な判断ね。それで？何か用かしら？」

レミリアが尋ねる。

「頼みがあるって言ったら？」

「断る。」

「何故？」

カチャツ。

レミリアが紅茶が入ったカップをテーブルに置く。

「大方、フランの事でしょう？」

「話が早いな。」

「駄目よ。」

「……外に出してはいけない理由でも？」
直人は尋ねる。

「……あの子の力は危険過ぎるのは、貴方が一番解っているでしょう？」

「確かに、フランの能力は危険だ。情緒不安定なら尚更だな。」

「なら……」だが、それとこれとは別だ。「……どういう意味？」

直人は“正しいか間違っている”言葉を紡ぐ。

「彼女は“世界”を見たがっているだろう。その証拠に、彼女はチルノ達と遊んでいるからな。」

チルノ達は自然から生まれた種族であり、色々な所に行っている。それらの体験談を聞くフランに目に“濁り”は少なくなった。

「それがどうしたと言っのよ？」

「もし、彼女が力を制御出切れれば外に出してやるのか？情緒不安定にならなければ外に出してやるのか？」

「質問の意味が……！」

「お前は、彼女の事を大事に思う余りに彼女の自由を奪うのか！？」

「!？」

凶星だった。

「やっぱりか……。血が繋がった、たった1人の妹だもんな。心配だから、不安だから外に出したくないよな。でもな、お前さんも外に出るだろう？もしフランが」

言葉は続かなかった。

何故なら、ヴァンパイアクロウ（吸血鬼の爪）が眼前に迫っていたからだ。

ブンッ！

間一髪！

後ろに跳び、体制を整える。

「貴様に……、貴様に何が解る！？」

嘆く様に

悲鳴をあげる様に

レミリアが叫ぶ。

「あの子を抑える力が無くて、あの子に優しくしたくても出来ない……！ そんな、そんな無力感を味わえと言うのか！？」

「なら！止められるだけの力をm「身につけようとしたさ！でも！でも！身につける為の時間が余りにも長すぎた……！」……495年も、時間が過ぎたのか？」
直人は何も言えなかった。

それでも、直人は直人にしか出来ない事がある。

そう言い聞かせて、レミリアと対峙する。

「いくら時間が掛かってもな、束縛をする理由にも、会話をしない理由にもならない！」

「黙れ！黙れ！……貴様に！貴様に何が解る！？」

「解らないさ、でもその思いが少し歪んでいるのは解るんだよ。」

静寂。

そして、言葉。

「……月は“紅く”無いけれど……。」

本気で殺すわ

「俺が正しいとは思わないが……。」

殺れるものなら殺ってみろ！

孤独な男は愚者を演じる。

“吸血鬼の姉妹”の為に

紅魔館：孤独な男は罪悪を背負う少女とワルツを踊る（後書き）

次回はバトルかなあ。

紅魔館：愚者は佇む、ただそれだけの為に（前書き）

主人公のスペルはこの一幕が終わり、後日的な話で手に入れる予定。

何処まで表現出切るのかは、期待せずに。

BGM？亡き王女の為のセブテットより

紅魔館：愚者は佇む、ただそれだけの為に

（紅魔館・ロビー）

別れ階段がある広いロビー。

空間は咲夜が弄くっていたので、かなり広い。

そんな場所に、愚者と吸血鬼が死闘を繰り広げている。

「はあっ！」

ブオンツ！

レミリアは爪を伸ばし、直人の喉を搔つ切ろうとするが直人は避ける。

「く………！」

「……………」

最早言葉すら放つ気は無い、と言わんばかりに沈黙を保つ。

1度レミリアは、幻想郷を支配しようとしたが紫に撃退され諦めた過去がある。

その時に、紅魔館に入ってきた人間を“一応殺さない”と言う盟約が設けられた。

代わりに紫が、外の世界から自殺志望者・浮浪者などを攫いその人間の血を与える。

血を与えた人間の末路は、言わずがなとも

そんな盟約がレミリアの頭をよぎるが、直ぐに忘却の彼方に押しや

座り込んだまま動かない直人。

（ふんっ。口ほどにも無い。）

そう思い、踵かかとを返かえそうとした瞬間！

ビュンッ！

ボンッ！

「が……………!?!」

「……………余り、俺を見くびるなよ?」

直人は悠然と立っていた。

「……………何故だ?あの攻撃は普通の人間では耐えられない筈……………!?!」

「いや、俺普通じゃ無くな?」

「……………能力かッ!（ギリッ!）」

酷く顔を歪めながら、直人を睨みつける。

「どうする?まだ踊り足りないか?」

「ほざけっ!」

レミリアはカードを切った。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!?!」

ブウンッ!

レミリアの頭上に赤きエネルギーの槍が出現する。

「この槍に貫け無い物など無いわ……！」

「なら、その槍をへし折ってやるさ！」

「減らず口を……！」

レミリアは槍を投げた！

ビュンツ！

直人に直撃する僅か1cmジャスト！

ヒュパツ！

何かが切れる音がした。

赤いエネルギーの槍 グングニルが真横から真つ二つにされた瞬間だった！

「馬鹿な……！何故……何故“手刀”で！？」

「そろそろ俺の能力を教えてやるよ。俺の能力は“あらゆる物・事を増減する程度の能力”だ。」

「能力でグングニルを上回る力を増やしていたと言うのか！」

「グングニルの耐久度も減らしてはいたがな。」

余談だが、フラン戦の時もフランの握力も減らしていたのは此処だけの話である。

「なあ、お前は“姉”だよな？」

「……だからどうした？お前には関係無いだろ。」
「そうだな。でもな、以外に共通点があるんだよ。」
「それは何だ？自分が兄だとでも言うのか？」
「逆だ。俺は“弟”だったんだよ。」

直人の姉は7つ離れていた。
しかし、不慮の事故で無くなった。

「それで、フランの気持ち解るから私にあんな事を頼みに来たのか？」

「解らないさ、フランの気持ちなんてな。でもな、兄弟姉妹には共通している事があるんだよ。」

それは、フランにも言った言葉。

「兄や姉は弟・妹を、弟や妹は兄・姉を“心配”してるんだよ。どんなに酷い事をされてもな。そして、仲良く笑いあいたいんだ。それが、兄弟姉妹って奴だ。」

直人は笑みを浮かべ言い放った。

「……どうしろって、言うのよ。私は、あの子を閉じ込めていたのよ？今更、どんな顔をして、どんな話をしろって言うのよ！？」

レミリアは“涙”を流した

レミリアの卑屈な言葉は、掻き消え“無かった”。

「何よ……それ……！本当に、そんな事を思っているの！？」

直人とレミリアが1階廊下の方を向く。
其処には、フランが居た。

泣きそうな顔で

紅魔館：愚者は佇む、ただそれだけの為に（後書き）

次回はいよいよ終幕です！

しかし、バトルシーンの表現が下手な気がする……。。

紅魔館：雨は嫌いだ、雨降って地固まる（前書き）

今回が終幕の予定です。

次回に持ち越さない様に頑張るぜ。

紅魔館：雨は嫌いだが、雨降って地固まる

（紅魔館・ロビー）

フランは今にも泣きそうな顔だった。

「何がどんな顔をして会えないって言うのよ……！何がどんな話をすれば良いのか解らないって言うのよ……！私は……！」

フランは俯く。

そんな中、直人はフランの居る廊下に向う。

「ちょっと……。」

レミリアが呼び止めるが、直人はそのまま進み。

「……此処からは俺の出る幕じゃねえ。良いたい言葉があるなら二人で言い合え。」

そして、立ち止まり振り向く。

「今現在のお前達姉妹の、能力・筋力・握力等を減らしてある。そうだな、普通の人間の少女位だな。」

引っ叩き合うなり、口喧嘩するなり好きにしろ

そう言って、直人は廊下を通過した。

残ったのは“姉妹”のみ。

「……………フラン、私は……………」

「何よ……………、自分が悪いって勝手に思ってた、私に嫌われているから会いに行くのが怖かったって言うの？」

「……………そうよ、私は貴女が怖かった。能力よりも嫌われる事が、怖かった……………。当たり前よね、495年も貴女を閉じ込めていたもの……………当たり前よね……………。良いのよ、貴女には“権利”があるわ。私を憎む権」「いい加減にしてよ！……………！？」

フランは泣いていた、“自分の気持ち”が伝わらない姉に対して
自分の気持ちを伝えられなかった自分に対して
泣いていたのだ。

「私が……………、私が何時あんたを嫌いって言ったのよ……………！何時、あんな顔を見たくないって言ったのよ……………！本当に……………！本当に私がそう思っていると思っっているの！？」

「でも……………！私は……………！貴女を……………、貴女の“時間”を奪ったのよ！？」

レミリアもまた泣いていた、妹の気持ちに気づいてやれない自分に対して
妹の会う事から逃げた自分に対して
泣いた。

「……………確かに、あんたが私を閉じ込めて時間を奪った事は怒りたいよ？でも、だからって“恨む”訳ないじゃない！“憎む”訳ないじゃない！たった……………、血が繋がっているたった一人の家族なんだよ！？」

「……………！」

「何よ……………、あんたは……………、“お姉さま”は血の繋がった姉妹じゃ無いの？」

その時、レミリアはフランを　　抱きしめた。

「そんな訳、無いじゃない。」

「なら、何で迎えに来てくれなかったの？私、待ってたんだよ？」

あの地下室の扉を開いてくれる人が、姉が来るのを

「……………本当は、もっと早く迎えに行きたかった。でも、私は怖かったのよ。」

貴女に、拒絶されるんじゃないかと、怖くて……………怖くて……………開けられなかった

2人は抱きしめあつたまま、動かない。
不意に、フランが言った。

「嘘言わないでよ……………、本当は、“開けてくれた”んでしょ？」

「……………パチエね？」

「うん……………」

妹様、お話を聞かせてあげましょうか？

もう！フランって呼んでよ！

あら、それで良いなら遠慮なく。

それで！どんなお話なの？

姉妹のお話よ。

……ふん。

ある所に2人の姉妹が居りました。
しかし、2人は部屋から出られません、何故なら鍵が掛かっていたからです。

其処で姉は何とか出口を探し、そして、1人が抜け出せる様な穴を見つけます。

その時、姉はお腹が空いておりました。

妹は寝ていて、姉は空腹に勝てず1人部屋から出ました。

食料を手に入れるのに、少し時間が掛りましたが空腹を満たした姉はついでに部屋の鍵を探します。

また少し時間が掛りましたが、何とか姉は鍵を見つけ部屋の鍵を

……止めて。

……結末を、知りたくないのかしら？

……あいつは、開けてくれなかった。

………そういえば、一度変な声ができるから付いて来てってレミィに言われた事があったわ。

何でも、地下から聞こえたらしくくてね、下った先の部屋の鍵を開けて入って行ったわね？。

………え？

部屋から出てきた時、少し悲しげな顔をしていたけどそれでも嬉しそうに顔をしていたわ。

まるで、“元気な少女を見守る” 姉の顔ね。

…………… 今度は起きてる時に開けて欲しいなあ。

そうね。

「ごめんね。勇気が無かったから……………」

「ううん、良いよ。私も同じだったから……………」

その後は紆余曲折の末、騒動は終結した。

影の功労者はと言うと。

「なあ、あんたはあえて俺を通したろ？ “咲夜” さん？」

直人は今回の“黒幕”に問う。

「あら？何の事かしら？」

「惚けるなよ。大方、美鈴って人が起きていたのはあんたが起こしたからで、俺の能力を確かめたかったって所だろ？」

「確かに、美鈴から話は聞いたけど、今回の事を即興で計画出来るとても？」

「出来ないな。でも、あんたは俺が幻想郷に来ていたのを知っていたな？」

「あら？何故そう思うの？」

「直感かな？」

「どごその巫女より当てにならないわね……………」

「でも、俺を知っていたのなら辻褃が合うんだよ。」

「…………ふう、そうよ知っていたわ。」

「何時知ったのさ？」

「昨日かしらね、人里に買い物をしに行った時、霊夢の嬉しそうな叫び声が聞こえて来たのよ。何事かと思って時を止めて見に行ったら、貴方が居たという訳よ。」

「うわぁ…………、霊夢のアホ…………。」

「でも、正直此処まで上手く行くとは思わなかったわ。」

「良くてどんな感じになる筈だったんだ？」

「貴方が妹様に負けて、お嬢様が止めに来るってのが一番ありえそうなパターンだったのだけれど…………。」

「予想外な事に、フランを圧倒していたからな。」

「そうなのよね。でも、ありがとう。」

「何、俺はただ自分がしたい事をしたまでさ。」

「それでもよ。」

「そうかい、どういたしまして。」

「所で、魔理沙はどうした？」

「本を盗んで逃げたわ。」

「…………明日締め上げとく。」

「お願いね。」

魔理沙に悪寒が走った。

紅魔館：雨は嫌いだ、雨降って地固まる（後書き）

後日談的な話で、第二幕の予定。
もしくは少しほのぼの。

とりあえず、金髪の泥棒は締め上げられました。(前書き)

魔理沙は犠牲になったのだ……。

後日談的な事です。

そろそろスペルカードを作る予定。

とりあえず、金髪の泥棒は締め上げられました。

〔霊夢神社・境内〕

あの紅魔館での事件から3日後、直人は神社の前の掃除を終えて茶を啜っていた。

「ふう〜、……上手いなあ。」

「何年寄り臭い事を言ってるのよ。」

霊夢が呆れ顔で言う。

「あれ？そういえば魔理沙を見ていないわね。」

「あいつはシバいた。」

「何だよ？」

「泥棒の共犯者は勘弁して欲しい。」

「捕まえる奴は紫もやししか居ないわよ。」

「まああれだ、信頼関係は大切にしたい主義なんだよ。」

「ふうん。それで、魔理沙はどうなったのよ？」

「拳骨を喰らわせておいた。」

「普通に？」

「少し増やして。勿論、死なない程度にな。今頃はタンコブがやっ」と引いたって所だろ。」

そんな会話をしていると、空から魔理沙がこちらに向かって来ていた。

「噂をすれば何とやらだな。」

「直人ー！」

「何だ？」

「何だ？つじや無いぜ！」

「はいはい。」

「流すな！痛かったんだぜ！？あの拳骨は！？」

「自業自得だな。」

「理不尽だ！？私は借りてるだけだぜ！？」
その言葉に2人は言った。

『何処が(だ・よ)。』

「チクシヨー！(泣)」

そんなやり取りの中、さらに来客がやって来る。

「ナオトー！」

日傘を差したまま、元気に突撃してくる少女 フランだった。

「うお！？フラン！待て！待つんだ！」

「どかーん」

「アーーーーー！？」

ピチューン！

「……………今日も平和ね。」

ズズツ！つと茶を啜る霊夢。

「しかし、何でフランが外に居るんだぜ？」

「私が許可したのよ。」

魔理沙の疑問に答えたのは、日傘を差したレミリアだった。

その後ろには咲夜も居る。

「へえ、珍しい事もあるもんだな。」

「やあねえ、雨が降るわね。」

「其処まで珍しいかしら？」

『うん。』

「何も其処まではつきりと言わなくても……………」
落ち込む主の姿を見た咲夜はと言つと。

(お嬢様……………、可愛い)
和んでいた。

フランは直人と遊んでいる。
弾幕ごっこでは無く、咲夜が持ってきたトランプだ。
スピードである。

本来人間は、吸血鬼の身体能力に付いていけないが、直人自らの身体能力を上げている為付いていけるのだ。

緊張が流れる。

『スピードッ！』

ダンッ！ダンッ！

其処から果てしない速さでカードが出されていく！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

「えー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！！！！！」

……余談だが、この神社は建て直されている為耐震強度は問題無いのだが、流石にみしりっ！っ！と音がした。
直ぐに霊夢がピチュラせた。

「まったく、あんだ達は……。」

「すまん。」

「ごめんなさい。」

不意に、魔理沙が聞いてきた。

「なあ、直人はスペルカードを作らないのか？」

「ああ、そういえば。」

「あら、そういえばそうね。」

「そうだね。」

「そうですね。」

5者5様である。

「別にそういう訳じゃないけど……、そもそも、どうやって作れば良いんだ？」

そう尋ねると、霊夢が立ち上がり奥に消えた、かと思うと1枚の白い紙を持ってくる。

「これを使うのよ。」

「これ？」

「そう、“スペルカードの元”よ。」

「何で1枚しか無いんだぜ？」

「紫が言ってたのよ、『直人なら能力で増やせるから問題無いわ。』
だって。」

「やれやれ。」

とりあえず、どんな効果の能力を作ろうか考え様とした時、魔理沙が声を掛けて来た。

「なあなあ、香霖堂に行かないか？」

「香霖堂？」

「何それ？」

直人とフランが聞いてくる。

「外の世界の物を含め様々なアイテムを拾っては商品にしているんだぜ！」

「魔理沙の小さい頃からの知り合いらしいわよ。」

「幼馴染って奴か。」

「まあな。」

「で、何で其処に？」

「何、直人は身体能力を上げられるからと言って、時間が掛かるだろ？」

「まあな、相手が本気で来ない間に能力で上げてるからな。」

「あら、私と戦った時は既に身体能力は上がってたけど？」

「いや、普通に会う前から上げてただけだから。」

「つまり魔理沙はこう言いたい訳ね、行き成りの攻撃を喰らっても切り抜けられる防具を買いに行くって訳ね。」

「その通りだぜ。」

魔理沙の言っている事は一理ある。

不意打ちを喰らえば、どんなに能力でカバー出来ても一瞬で終わってしまう。

その為の防具が必要ではあった。

そんな訳で、香霖堂に向う事になった。

とりあえず、金髪の泥棒は締め上げられました。(後書き)

今回はこれだけ。

動かない古道具屋の店主はまさかの性癖（前書き）

とりあえず、ふんどしネタにしようかなと思ったんだが、止めてくれってメール来たんで止めました。

……………次こそは（ボソッ！）

動かない古道具屋の店主はまさかの性癖

〔香霖堂・入り口前〕

直人と魔理沙は香霖堂に来ていた。

フランも来ようとしたが、睡魔が襲ってきたので寝てしまった。それで館に帰った。

店の前に1人の少女が居た。

後頭部と背に鮮やかな赤色の翼を生やした少女だった。

「ん？あの子が店主か？」

「いや違うぜ。あいつは朱鷺子って言って妖怪で、此処最近香霖堂に来てはいるんだぜ。」

「ふーん、何故に？」

「霊夢が本を強奪したんだぜ。」

「……あの馬鹿巫女。」

「拳骨か？」

「お前の倍のな。」

「哀れいむだぜ。」

地上に降り立つと、朱鷺子がこちらを一瞥してからまた読書に集中する。

「パチユリー並だな。」

「まったくだぜ。朱鷺子、こーりん居るか？」

魔理沙が尋ねると、小さい声で返答する。

「今は……何か……やってる……。」

「何かって何を？」

「さあ……？」

魔理沙が会話をしている間に、直人は店の扉に手を掛けた。

「ちわー！三河やで……………」
直人は冗談を良いながら入ろうとしたのだが、言葉が詰まった。
何故なら。

霖之助が巫女服を着用していたからだ。ごく丁寧に腋まで見える巫女服である

「……………」
「……………」
「おーい、どうしたん……………だ……………ぜ？」
「どうした……………の……………？」

ぜんいんは ちんもく してしまった！

ヒュー！

風が吹く。

そして、時は動き出す。

「へー！」
「んー！」
「……………た！」

「いーじゃー！無いよ！？」

本人は否定するが、説得力があるわけも無く。

「じゃあ何でそんな格好してるんだぜ！？」

「これは……………！そう！性能を試してるんだよ！」

「何の性能を試しているんだよ！？」

「……………通気性？」

「……………何で疑問文なの？」

とりあえず、詳しい事情を聞くために霖之助には着替えて貰った。

「まったく、あんな趣味があつたとは流石に驚いたぜ……。」

「まあまあ、誰だって知られたくない性癖があるんだろ。それは否定しようにも否定できない性癖なんだろう。」

「……悲しい……性癖……。」

そんな会話をしてると。

「違うからね！？そんな性癖無いからね！？」

珍しくツツコミ役な霖之助。

少しして、霖之助が戻ってきた。

魔理沙が着ている服と同じ服で

「お待たせ。」

「……………。(スチャツ！)」

無言で八卦炉を構える魔理沙。

「ちよっ！？何で構えるんだい！？」

「その服は喧嘩を売ってるしか思えないぞ。」

直人が指摘した時、霖之助は自分の格好に気づいた。

「い、いや！違うんだ！これも性能を試していた服で……………！」

「マスター……………！」

「もう一度！もう一度チャンスをくれ！」

再び着替えに行った霖之助。

魔理沙の機嫌は最悪であった。

「ま、まああれだ。性能を試しているって事は、何らかの機能を付ける為に試行錯誤しているからじゃないのかな？」

直人はフオローしたが。

「……………。」

ギロツ！

音がするほど睨まれた。

「すみません……。」

しばらくして、ちゃんとした格好　眼鏡付き　でやってきた。

「いやまあ、見苦しい所を見せたね……。」

「あー、何と云うか……。」

「いや、こちらも鍵を掛けておけば良かったんだ。」

「……こーりん。」

「な、何だ？」

「迷惑料として、今回はタダにして貰うぜ？」

「いつもタダだろう。」

「あん？」

「何でもないです。」

とりあえず、装備品を無料で貰える事になった。

動かない古道具屋の店主はまさかの性癖（後書き）

今回の霖之助は、変態扱いだがやる時はやるキャラである。

この小説ではだが。

武器とは身体・攻防手段・そして使い方次第で善にも悪にもなる（前書き）

今回は主人公の武器を手に入れるの回。

籠手^{こて}で、先端に の刃が付いているタイプ。

ハンドガン一丁。（弾は実弾と弾幕の2種類）

小道具として、音楽プレイヤーが望ましい。

武器とは身体・攻防手段・そして使い方次第で善にも悪にもなる

（香霖堂）

あの一件で不機嫌度が最高潮な魔理沙。

白い目で霖之助を見る朱鷺子。

苦笑いしか出来ない直人。

汗ダラダラな霖之助。

………店内の空気はまさに混純カオスだった。

とりあえず、直人が話を切り出す。

「えっと、今日此処に来たのは身を護る武器が欲しいから来たんだ。」

「おや、そうなのかい？」

「ああ。」

「どんな武器を使うか決めてあるかい？」

「ああ。最初は籠手かごてで、先端に の刃が付いているタイプ。次にハンドガンって言う銃一丁で、実弾と弾幕を交互に切り替えられる機能付きが欲しい。小道具として、音楽を聴ける装置があれば良いんだが……。無理か？」

霖之助は少し考えていた。

しばらくして、直人に言った。

「籠手はこちらで作れるけど、銃は僕より“にとり”に頼むと良い。」

「にとり？」

「妖怪の山の upper に住んでいる河童だよ。」
魔理沙が捕捉を入れる。

「幻想郷では機会を作る事を得意とする奴等だぜ。」

「へえ〜。あ、もしかして霊夢の所の台所も……。」

「その通りだぜ！」

「とりあえず、銃に関してはにとりが精通している筈だから、そっちに頼むと良い。しかし、音楽を聴ける装置はにとりでも無理だと思っが……。」

「あら、それなら問題ないですわ。」

『!?!?』

全員が入り口を見る。

無数の目玉が“スキマ”から見える

そして、紫が上半身を見せる。

「お久しぶりですわ。」

「あ、ども。」

「直人君、君は隙間妖怪と知り合いかい？」

「どちらかと言うと脅しを掛けた被害者です。」

「……………脅されたんじゃないのかい？」

「あら酷い、私の様な弱い少女が、男性を脅せるとでも？」

『うん。』

その言葉に全員が肯定した。

「……………お世辞でも良いから、そこは見えないって言うて欲しかったわ……。」

「それで、問題無いとは？」

霖之助が尋ねる。

「これを見よ！」

「こっちも見ろ！」

直人が霖之助を指す。

「どういう意味だい？」

「変態予備軍です。」

「直人……、ノリノリだぜ！」

「……………（クスクスツ！）」

「話が進まないから続けて。」

「ええ、解ったわ。直人、これに見覚えあるわよね？」

紫は音楽プレーヤーを見せる。

「あ、俺の音楽プレーヤー。」

「ええ、貴方の私物にあつたわ。かなり思い入れがあるみたいね？」

「まあな、外で初めて働いて稼いだ金で買った奴だからな。」

「ふむ、それで？それをどう使うつもりだったんだい？」

「スペルカードの発動に使おうかと思つて。」

「プリズムリバーの様なスペルか？」

「誰だ？」

「音の能力を持つ幽霊三姉妹だぜ。」

「まあ、似たようなものかな。ただ、こちらは歌だけだ。」

「じゃあミスチーと同じだな。」

「へ〜。」

「こほん！」

紫が咳き込む。

「あ、すみません。」

「一応、この装置の“電波と受信の境界”を弄つといたわよ。」

「どういう効果があるんですか？」

「外の世界の歌が更新される度に“自動的に受信”するのよ。」

「様は更新されると？」

「そういう事ね。」

「結果は大丈夫なのか？」

「スキマ経由だから問題ないわ。」

とりあえず、霖之助に武器の製作を依頼する際、素材をどうするか話合った。

「緋々色金ヒヒイロカネを使いたかったって？」

「ああ、出来ればだけど……。」

「と言つてもねえ……、魔理沙の八卦炉に使ったのが最後までもう手に入らないかも知れないんだ。」

そう言われ諦めかけた時、ある事を思いついた。

「なあ霖之助さんよお、欠片一粒も無いのかい？」

「呼び捨てで良いよ。ああ、そう言えば欠片分しか余らなかつた奴ならあるよ？」

「持ってきてくれないかい？」

「良いけど……、どうするんだい？」

「それはお楽しみだ。」

しばらくして、欠片分の緋々色金を持つてこられた。

「これしかないよ。」

「しかし、相変わらず金色の光を放つぜ……。」

欠片だが、人の顔を映せる程に輝いている。

「人の気質が緋々色金になったと言われる品物だからよ。」

紫の捕捉。

「で、どうするんだい？」

「ちよい待ち。」

直人が能力を発動した。

すると、欠片の隣に“金塊”1つが増えた。

「なっ……………!?!」

「おおっ!」

「……………凄いや……………!」

「……………。(相変わらず反則ね…………。)
思い思いな表現であった。

とりあえず、金塊の半分を使えば出来るらしいのでしばらく待って欲しいらしい。

その間に、妖怪の山に行こうと言う話になった。

「私が居れば問題無いぜ!」

「フラグたつたな…………。」

そんな会話の中、霖之助が直人に言った。

「また来てくれ、もしかしたら僕が直せない物も新品にもらえるだろうし。」

「あんたも商魂あるなあ。」

「紅白の巫女と白黒魔法使いが茶菓子“タダで持って行く”からね。」

その言葉に、魔理沙が反応する。

「……………霊夢の拳骨終わったらお前な?」

「NOOOOOOOOOOOO!!!!!!」

落ち込む魔理沙を引き連れて、妖怪の山に向うのだった。

武器とは身体・攻防手段・そして使い方次第で善にも悪にもなる（後書き）

嫁が出せたら良いなあ。

でも、新聞記者もそろそろ出さないとなあ。

流石に1週間も経ってるのに取材に来ないってのはなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8248y/>

孤独な男の幻想入り

2011年12月11日15時47分発行